

チベタン・チルドレンズ・プロジェクト

2017年 運営報告書



2017 年もサポーターの皆様のあたたかいご支援を頂きまして誠にありがとうございました。
1 年間の運営についてご報告をさせていただきます。

2017 年 決算の解説

2017 年の決算については前頁の通りです。当期収支は 775,181 円の赤字となり、2015 年より 3 年連続の赤字会計です。下記に本年会計の内容について解説をさせていただきます。

本年会計が赤字となった大きな要因は主に 2 つあります。まず 1 つ目はクンデ・ハウスの「プレハブの建設」です。プレハブ建設の経緯と必要性は 6 頁の「プレハブ完成」の中で詳しく説明をさせて頂いておりますのでそちらをご参照ください。運営上不可欠であり施設費が大幅な増加となりましたが、これまでの繰越金により一括で支払う事が出来ました。またこれは本年度のみの特別な支出であり、予算の執行自体は妥当であったと考えています。但しプレハブ建設によって賃貸オーナーとの契約の再交渉が必要となり（こちらの経緯についても「プレハブ完成」をご参照ください）、少なくとも 120,000 Rs/ 年の固定費が増える事となりました。契約上致し方ないとは言え、既に赤字が常態化しつつある状況をさらに悪化させる要因が増える事になってしまいました。

赤字の 2 つ目の要因は、物価の上昇です。IMF の発表によりますと 2010 年以降昨年まで、ほぼ毎年 9% を超えるインフレ率のネパールです。2015 年には大地震と経済封鎖により経済が大混乱し、物資が補給できない状況が長く続きました。この際にほとんどの物価が 2 倍以上に上昇しましたが、経済封鎖解除後も一度吊り上った値段は元の水準に戻る事はなく高止まりしています。子ども達の授業料や家賃もインフレ率に応じて毎年上昇します。クンデ・ハウスは孤児院と言う性格上、運営として収入を生み出しませんし、今後もますます子ども達の成長に合わせて学費や学習関連の支出が増えると予想されます。高いインフレ率が続き、節約などの対策では支出を前年度水準にすることは難しい状況です。

さらに収入面では任意のご寄附が年を追って少なくなってきました。本年はお一人の方から 100 万円のご寄附を頂きましたので、任意の寄付の合計金額が大きくなっていますが、このような大口のご寄附は特殊な事ですので、経営の安定化のためには収入を増やす取り組み、具体的には会員サポーター様が増える様な取り組みが必要であると考えております。

クンデハーバルクリニックは 8,038 円の黒字です。支払いが困難と判断した約 3 割にあたる患者様に無料で診察と投薬をご提供しており、これらの体制を維持して行くためにも赤字にならない運営を着実に進めて行きたいと考えております。一番大きな支出は約 59% を占める家賃です。

ネパール現地事務所の支出は 0 円ですが、これは税金等の支払いが年末までに間に合わなかったためです。支出を減らす目的で、納税や監査などの書類制作を依頼している法律事務所をコストの安い会社に変更しましたが、内容も値段に見合った仕事ぶりや納税を始めとする各種資料が年内中に仕上がらず、税金、監査関連の支払いが遅れたため支出が 0 円となっています。本来 20 万円を超える支出があるはずの項目ですので、従来通りのスケジュールであればさらに会計の赤字が膨らんでいたことになります。

東京事務所の支出 266,301 円の約 86% はネパールに運ぶ物資の購入です。日用品の多くが中国から輸入されている現在、特に子どもの衣類などは質の悪さに対して非常に値段が高いため、会員サポーター様やスタッフが渡航するタイミングで、日本で耐久性の高いものを購入し運搬しています。



2017 年 運営の報告

1 年間の主な出来事を右にまとめました。
2017 年の運営を時系列で振り返りたいと思います。

チトワン旅行

サポーター様が企画をして下さり、3 月末の春休みにクンデ・ハウスの子ども達をチトワン国立公園に連れて行って下さいました。2 泊 3 日のこの旅行は、1 年以上も前から里親さんのうちのおひとりが企画を練り、資金の提供を職場やご友人の間で募り実現して下さいました。

宿泊を伴う旅行は子ども達にとってはとても贅沢なものです。難民であるという立場とネパール大震災以後なかなか復興が進まない現状を踏まえ、また昨年サポーター様にお申し出頂いたポカラ旅行を催行している事もあり、実現に向けた話し合いの初期には、本年の旅行は自粛したいと申し上げました。

しかし教育に携わっておられる里親さんのご自身の経験から、子ども時代により多くの体験をさせる事の重要性について何度も説得を頂き、最終的には旅行を実行させて頂く事と致しました。

実行に当たっては、チトワン旅行を計画した時期にネパールをご訪問下さる別の里親さんのご協力も得て、スタッフ 2 名に加えて里親さん 3 名、里親さんの息子さんとそのご友人が各 1 名、合計 7 名の保護者で引率をし、十分に子ども達に目が行き届く体制を敷く事が出来ました。



初めて見る野生のワニや象の背中に乗ってジャングルを探検するなど、子ども達にとって想像を絶する体験の数々はとても大きな刺激になりました。また少数民族のダンスを見る機会にも恵まれ、その音楽や衣装にも非常に魅了されている様子でした。ネパールが多民族国家であるという事は、学校でも学習し、折に触れてネパールでは語られる話題であります。これまでも民族博物館などの見学をしてきたこともあって、子ども達も知識としてはよく知ってはいましたが、こうして実際にその方達の文化に触れて初めて、頭で得た知識が体感として落とし込まれている様子がスタッフにも分かるほどでした。

- | | |
|------|--|
| 3 月 | チトワン旅行 |
| 4 月 | ヴィパッサナー瞑想 7 日間参加 (女子 4 名)
ラクパ・センゲ入居
プレハブ完成 |
| 10 月 | ヴィパッサナー瞑想 3 日間参加 (年少 5 名)
日本山妙法寺合宿 (男子 3 名) |
| 11 月 | 歌謡大会参加 (女子) |
| 12 月 | スタッフ新規採用 |

またチトワンはカトマンズから通常でも車で 8 時間以上、この時には道路工事もあって実に 13 時間を掛けて移動する道のりでしたが、その移動距離の長さによってネパールと言う国の大きさを実感した様子でもありました。移動途中で目にする山岳部の村の生活の様子もカトマンズとは大きく違って、自分達がこの国のどのような場所でどのような生活をさせてもらっているのか、少し俯瞰した視点で考えられるようになる切掛けを得たようにも思います。

情報として「知っている」と言う事を、実感を伴った「理解している」というレベルに引き上げるためには、やはりこのような実地体験が不可欠であるという事を改めてスタッフが実感した旅行でもありました。



❖ ヴィパッサナー瞑想合宿参加

本年は、2度にわたってクンデ・ハウスの子ども達合計9名がヴィパッサナー瞑想合宿に参加しました。ヴィパッサナーはインドの古くからの伝統的な瞑想法のひとつで、2500年以上前から行われてきたと言われていいます。現在では世界中にこのヴィパッサナー瞑想を行うセンターがあり、通常10日間の完全瞑想と前後2日のオリエンテーションを含む12日間の合宿プログラムが提供されています。またその運営は全てドネーションで行われています。ネパールにもヴィパッサナー瞑想のセンターがあり、これまでも何度かスタッフはこちらで瞑想をしています。加藤が3月に瞑想合宿に参加した際、子ども達のよりよい教育についてセンターの方達に相談をさせて頂いたところ、子ども向けのクラスをご紹介下さり参加させて頂く運びとなりました。



4月開催の女子ティーンエイジャーコース7日間(前後のオリエンテーションを含むと9日間)に、ダワ、パサン、カンド、インシが参加しました。このコースは一般成人が参加するクラスとほぼ変わらないプログラムで、早朝から瞑想三昧の7日間を過ごしました。

クンデ・ハウスに帰って来た年長女子達は非常に穏やかで落ち着き、明らかに送り出した時とは違う空気を湛えていました。参加の感想を聞いてみると「怒りが起こる瞬間を客観的に見られるようになり、怒ることがほとんどなくなった」「いつもネガティブな事ばかりに反応してポジティブな事には気が付きにくく、しかも気付いても直ぐに忘れてしまっていると感じた」「瞑想をすると全てが心の作用と気が付いた。この瞑想を知っていれば、死ぬ時に迷うことなくこの体から去ることが出来ると思った」など、スタッフが予想していた以上に深く瞑想の世界を体感してきた様子でした。

年長女子達が絶賛する瞑想合宿に、早速男子も送り出そうと考えたのですが、あいにくティーンエイジャー男子のクラスは合宿が予定されておらず、参加は叶いませんでした。

年2回開催される瞑想合宿の秋の部には年齢の小さい子ども達を送り出しました。チルドレンコース3日間にはヌモ、チュ

ズム、クンガ、デチェン、ツェテンが参加しました。年少の子ども達も帰宅後その体験をイキイキと語り、合宿での生活がとても充実していたことが伺えました。殊に合宿で交流したお友達に刺激を受けていた様子です。どの子も穏やかで親切で、子ども達曰く「天使の様な子」そうです。同じような年齢の子ども達の振る舞いを見て、見習うべきポイントが素直に心に落とし込まれた様子でした。

この様に「自分で気付く」事が自らを律し変えて行くもっとも強い原動力になると感じています。どの学年の子ども達にとっても、非常に有意義な瞑想合宿でした。その後も子ども達は、事ある毎に「来年も参加したい」と言っておりますので、タイミングが合えば参加を検討したいと思います。

ヴィパッサナー瞑想に参加が叶わなかった男子のうちタシ、タチェン、チュインが、日本山妙法寺の佐藤上人のご厚意により秋休みの10月にルンビニにあるお寺で7日間の合宿をさせて頂きました。早朝4時からのお勤行ではお経を唱えながら村を回り、昼はお寺巡りや寺院の清掃など忙しくも充実した日々を過ごしました。クンデ・ハウスの日常を離れ全く異なるコミュニティの中、佐藤上人のもとで数日だけとは言え男子だけの生活を体験し自主的に責任を負って生活する事に対しての意識が高まった様子でした。子ども達は佐藤上人が大好きで絶大な信頼を寄せており、妙法寺での合宿は今後もいつでも行きたいとの事です。

4月に年長女子達がヴィパッサナー瞑想に参加させて頂いた後、センターの先生が9名でクンデ・ハウスに瞑想指導に来て下さいました。活動の一環として、様々な施設を訪問しての指導を行ってられるとの事で、これにより全員がヴィパッサナー瞑想の指導を受ける事が出来ました。

その後、朝晩に時間を取って瞑想を行うようになりました。3か月間瞑想を1日2回実施したのですが、早朝から起きて家事をこなし、学校や習い事で忙しく過ごす子ども達は瞑想中に寝てしまう事も多く、みんなで話し合った結果、現在は瞑想を一時中断しています。無理に時間を取っても集中しないのであれば意味が無いので、また期が熟したと思われる時に再開したいと考えています。



🌱 ラクパ・センゲ入居



本年3月、これまで海外の支援で運営してきた震災児童の引き受け施設が経済的な事情で次々に閉鎖したため、行き場を失った子どもの引き受け要請が6名ありました。クンデ・ハウスもお引き受けする児童の数には限界があり、引き受け候補の児童に関して慎重に調査を進め、中でも緊急性が高いと判断した2名に対して面接を重ね、うち1名をクンデ・ハウスに迎える事になりました。ちなみに引き取りを検討したもう一人は、片親の生存が確認されたために最終的には受け入れをお断りしました。

このような経緯を経て、4月にラクパ・センゲがクンデ・ハウスに入居しました。引受時の年齢を推定5歳としておりましたが、実年齢はそれよりも幼い様子です。震災の際にTCPが緊急支援を行ったラスワの出身です。ここはチベット国境に近く、昔からチベット人の亡命者が多く住んでいるのですが、震災で村がほぼ全壊してしまい、その際に家族を亡くし（どこまでの親族を無くしたかの詳細は調査するも明確にならず。少なくとも両親、兄弟は他界）その後、震災孤児として寄宿学校かそれに似た施設に預けられるがいずれも長期でなく、数回にわたって様々な施設を転々と移動させられた後、最終的にアムチの友人の僧侶を通してTCPへの引き受け要請がありました。

これまでクンデ・ハウスは「亡命してきた孤児」という基準に基づいて身元を調査した上で、子どもをお引き受けしてきました。ネパール震災後は非常事態であり、この枠組みをネパール国内で生まれた2世、3世に広げるべきなのではないかという議論も出ました。しかし「クンデ・ハウスならどんな子どもでも引き取ってもらえる」と噂が広まってコントロールが不可能な状況に陥る事を懸念し、現在まで両親のいない孤児の受け入れを基本としております。

「孤児」である事にこだわる理由は、過去に例外的に親の育児放棄を見かねて引き取った亡命2世（母親健在、父親失踪）についての苦い経験があるためでもあります。栄養失調状態でクンデ・ハウスに置いて行かれた子どもが、その後充実した食事と教育で健康に育ち、2年5ヶ月後その様子を見た母親が「子ど

もをTCPに取られた」と騒ぎを起こしたことがありました（詳細は2012年運営報告書に掲載させて頂いております）。お預かりする際に交わした契約書を全て反故にし、一方的に子どもを取られたと吹聴され大きな騒ぎとなりました。子どもの利益を最優先し如何に整った契約書を交わしても、親子と言う血縁関係を主張されるとTCPは無効でした。

また既にクンデ・ハウスは高いレベルの教育が受けられると一部では評判になっており、全てが無料であるならば多少の嘘をついてでも子どもを預けようとする親御さんの存在も伝え聞いています。

このような経緯から、身勝手な親が一時的にクンデ・ハウスを利用するようなことが慣例になってしまう様、児童の両親の生存確認には念を入れています。

「どのような事情であれ、自分達より困っているなら受け入れるべき」というのがTCPの代表であるシェラップ（アムチ）の意見です。しかし無理な引き受けをして運営が立ち行かなくなってしまっては意味がありません。子どもの受け入れに関しては毎回スタッフの間でも大激論になりますが、それは各人がその子の人生を丸ごと引き受けるのだという真剣な気持ちがあるからです。今後もその都度、何が最善の方法かを多角的に話し合い、可能な事は心を尽くして取り組みたいと考えております。

🌱 プレハブ完成

政府の認可・登録を得ているTCPは、毎年その運営状況が適切であるかどうかネパール教育省の監査を受けます。孤児院として登録しているクンデ・ハウスはここ数年「男女の寝室を別棟にする」様に指導を受けて来ました。実情として別棟を実現するためには時間と資金が必要な事をご理解頂き、男女の寝室をフロア別にするなど努力する姿勢を見せて来ましたが、2016年は7月の監査に加えて12月に抜き打ちでのチェックを受けました。プレハブの建設は3年ほど前から何度か見積りを取ってはいましたが、かなりまとまった額の出費になるために決断できずに数年が過ぎました。しかし監査を受けるための書



類制作を依頼している弁護士事務所からも「次回の監査までに是正しないと認可の維持は厳しい」との指摘を受け、建設に踏み切りました。

一般的にこのようなシステム化されたプレハブのような建物でも、ネパールでは建設の際、様々な備品はオーナー側で準備しなければならない為、それらにかなりの時間と労力を要しました。また想定内の事ではありますが工期が守られず、常に注意、監督しなければならないのもネパール特有の事情でした。途中、プレハブ業者自体が倒産するという事態に見舞われましたが、工事担当者を探し出し、紆余曲折を経ながらも無事に完成にこぎつける事が出来ました。

建設費はプレハブ本体が 1,400,000Rs(1,512,000 円)、設備・内装仕上げが 111,433Rs(120,347 円)です。大きな支出となりましたが、予算の執行自体は妥当であったと考えています。

但し、プレハブ建設によってオーナー側から賃貸契約に関して再交渉を迫られました。「プレハブの土地の賃料として新たな支払いが必要」とであると言う非常に不合理な主張を、建設に着工した後でオーナー代理人から押し付けられました。一般的にネパールでは、孤児院に使用する目的で物件を賃料しながらないという事情から、私達が条件を拒否できないと踏んだ強気の値上げの提示でした。数か月に及ぶ交渉の末、10,000Rs/月で妥結しました。これにより今後少なくとも 120,000 Rs/年の支出が増える事となり(毎年物価上昇を理由にこの金額も吊り上げられると予想しています)、既に会計が連続で赤字となっている現在、新たな固定出費が増し頭の痛い問題です。

♡ 日本語歌謡大会参加

11 月の下旬に毎年カトマンズで開催される「日本語歌謡大会」にお声掛けを頂き、クンデ・ハウスの児童が参加させて頂きました。参加資格は日本にゆかりのあるネパール在住者でエントリーは 10 名以下のチームとの事でしたので、今回は女子全員(10 名)で参加させて頂きました。年長、年中の子達は思春期でもあり、この様な場に出る事を嫌がるかと思い、エントリーに際して意思確認をしたところ、大変乗り気で早速曲目の選定に取り掛かりました。

その後は子ども達による積極的な自主練習が行われ、その過程では、目標に向けて真摯な姿勢で協力し助け合う子ども達の姿勢が見られて、その団結力はスタッフも目を見張るほどでした。

当日は参加者の数や会場の大きさに圧倒され、これまでの練習の成果を充分に出し切れたとは言えないほど緊張した歌唱になりましたが、日本大使館の小川大使より特別賞を頂き、子ども達も自信を得ました。また会場には日本語が堪能なネパール人の方々もおられて、長らく日本語学習を続けている子ども達は刺激を受けた様です。

歌唱大会が終わった後も合唱の自主練習は続き、一つの目的の元に団結した素晴らしいチームワークを今後も継続、発展させることは出来ないかと考え、2018 年は合唱隊として老人ホームなどの施設の慰問を計画しています。カプセ等のお菓子を手作りして持参し、チベットの歌を歌い、困難な亡命生活乗り越えて来られたお年寄りに楽しんで頂けるような企画にしたいと思います。人に喜んで頂ける行いをすることの楽しさを体験し、その結果として子ども達の自己肯定感が高まればと考えています。

慰問活動の一つとして既に 12 月には、ネパールで活躍されている日本人音楽家、井上想さんのご紹介により、ネパールの盲学校 Disabled Service Association を訪問、歌を披露させて頂きました。普段交流の機会がない身体に不自由がある方々との交流は、自らの恵まれた立場をよく見つめる機会にもなりました。また愛情にあふれ細やかな心遣いでお仕事をされているスタッフの方々の働きぶりにも感銘を受け、特に年長女子はソーシャルワークに興味を湧いた様子でした。



♡ スタッフ新規採用

クンデ・ハウスの専属スタッフとして 12 月にツェリン・ラモを採用いたしました。実際は 8 月から住み込みで仕事を始めてもらい、子ども達との相性や仕事に対する姿勢などを確認させてもらいました。前職は僧院での食事作りをしていましたが、長らくチベットコミュニティの中だけで生活して来たためネパール語が分からず、そのために食料の買い出し等、任せる事の出来ない仕事も多々あります。また昨年まで勤務してくれていたアチャ・イシは還俗した尼僧でしたので、お経の指導やチベット語の教育も見ることが出来ましたが、ツェリンは学習面でのサポートは出来ないなどやや請け負える職務の範囲は狭いのですが、仕事の内容以上に性格の誠実さを重視して採用を決定いたしました。

その他のご報告

ここでは、この1年の大きな出来事以外に、サポーターの皆様にお伝えすべき内容について、ご報告をさせていただきます。

クリニックの運営状況

本年は毎月約150名の患者様にご利用を頂きました。設立当初、受診されるのはチベット人のみでしたが、アムチの腕の良さが口コミで広がり、現在の利用状況はネパール人とチベット人が半々です。以前は診察に来られるネパール人の方は経済的に非常にゆとりのある方がほとんどでしたが、最近は中間層の方々が家族や友人と集団で受診される事が増えました。

全診察の約3割は経済的に支払いが困難と判断し、診察・投薬を無料でご提供させて頂きました。

診断もさることながらクンデハーバルクリニックのシェラップは製薬が大変得意で、医師の仲間内でも高い評価を受けており、アメリカ、台湾、ノルウェーなどに亡命しているチベット人アムチからの要請で、チベット薬や原料を輸出する機会も増えました。子ども達は学校が休みの日にはクリニックで掃除や製薬の手伝いをしておりアムチを目指す子ども達にとっては研修の場になっています。



子ども達の進路と教育

子ども達がTCPにやってきたのは2008年12月のプレオープンから数えると9年前の事になります。学校教育を受けた事の無かった子ども達もそれぞれの努力と沢山の方々のお力添えにより、ここまで留年、落第者を出すことなく進級をしてきました。最年長のダワは今年8年生になりました。ネパールの学校は5年(小学校)、3年(中学校)、2年(高校)、2年(高等専門)と学校の区切りが設けられており、2018年春にダワは中学を卒業することになります。

幼い年齢からクンデ・ハウスに入居し幼稚園から通学を始めた子ども達に比べて、亡命後、実年齢にあった学年に途中から振り分けられた年長の子ども達は学習上のハンディが大きく、そ

の差をなかなか埋められない子どももいました。成績が良く、意欲のある子どもは12年生までの進学を考えていますが、あまり学校の勉強が好きではない子どもには中学卒業後、それぞれの特性に見合った就職先を考えたいと思います。8年の学習過程を終えて就職する事は、日本のように高校進学率の高くないネパールに於いては、特にタイミングとして早すぎるものではありません。



既にダワに関しては学校を含め中学卒業後の就職について話し合いを始めております。本人はTCPで働く事をイメージしていた様子ですが、社会勉強の為にはこれまでのコミュニティとは別の場所に所属することが良いのではないかと考えています。具体的な就職先としてスタッフ加藤の知人(日本人)が責任者を務めるフェルト製作工場の募集が来ておりますので、積極的に検討したいと思います。この工場は給与が歩合制であり、本人の労働意欲を高めるためにも、現在のところ最適な職場だと考えております。

2015年運営報告書でご報告をさせて頂いておりますが、成績が優秀なイシ(現在8年生)はISAK(International School of Asia, Karuizawa <https://isak.jp/jp/>)進学を目標に据えて今年も1年努力をし、いよいよ2018年は入学試験を受ける年次になります。



次世代のリーダーを育成する目的で設立された ISAK は世界各国から優秀な生徒が集まり、最終的な入学の可否は 2 週間のサマーキャンプで決定されます。2018 年 2 月にサマーキャンプの申し込みが始まりますのでエントリーし、まずはサマーキャンプに参加するための選抜試験を受けます。選抜試験は様々な分野の課題に対するレポート制作とスカイプによる面接です。これに合格するとサマーキャンプへ招待され、2 週間の滞在中に、課題、ディベート、面接を経て合否が決まります。また最終試験の成績により、最大で全ての授業料、生活費が免除される奨学金を受ける事が出来ます。

受験に対して十分な学習環境とは言い難いネパールですが、可能な限りの準備をしてきました。現在、渡航に必要なパスポートの申請等、事務的な手続きを進めております。

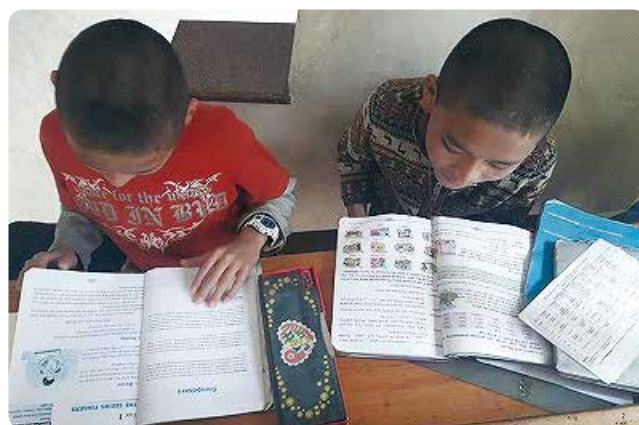


チベット医学医師（アムチ）を目指す子ども達は、本年も引き続きチベット語の学習と、チベット医学の基礎知識の学習を継続しています。シェラブの親族で以前から TCP で学習補助してくれている現役の医学校の学生パンチョルがチベット語を、シェラブがチベット医学の基礎講座を担当しています。アムチへの道は長く厳しい訓練を経なければならない為、どれだけの子どもが最終的に医学校への進学を希望するのか分かりませんが、希望者は 12 年生終了後にネパールのチベット系医学校に進学させたいと考えています。

学習以外の教育的な取り組みとして、本年は子ども達を 2 つのチームに分けてそれぞれに予算を渡し、文房具などの必需品をチーム内で相談して購入、管理させることにしました。この新方式は子ども達がよりモノを大切にする意識を高めるための施策です。

文具や学校で使用する備品、通学用の靴など、これまでは自己申告制で子ども達から申し出があった時に必要に応じて渡していました。靴などは底が抜けても何度か修理をし、これ以上修理が出来ない段階が来て初めて新しいものを支給していました。

しかし例えば消しゴムを失くしてしまった場合、反省してスタッフに申告すれば大抵新しいものが手に入りました。そこには「無



くしても最終的にはもらえるはず」という甘えがあるように見えました。特に文具などはそれが無いと勉強が出来ない為にスタッフも止む無しと考えていましたが、支援慣れした難民にしない為にも厳しい態度で臨むべきと考えました。全てが自己責任、そしてその責任は実際には連帯で追う形が最も効果的と判断し、チーム別に予算を渡し全てチーム内で運営管理する体制としました。予算が尽きても翌月の期日までは、一切の補填はしません。

このようなシステムにした結果、以前よりも備品の紛失が減り、ものを大切に扱うようになりました。チーム制なのでお互いに迷惑を掛けないようにという意識が働いている様子です。計画的にお金を管理する訓練にもなり、現在のところ当初意図した目的通りに機能しているため、段階的に管理する物品の範囲を広げて行きたいと考えております。

経済と暮らし

IMF による 2017 年 10 月時点の推計によりますと、2017 年のネパールのインフレ率は 4.48% で、地震と経済封鎖の影響を受けた 2015 年の数字を除き、2010 年以降はほぼ毎年 9% を超える状況であったことと比べると低い数値のように見えますが、生活の実感としては非常に厳しいのが実情です。

経済成長率は 7.49% と 2000 年代に入ってから最大の伸び率ですが、その恩恵を感じる場面は、特にチベット人コミュニティに於いては全くないと言ってよい状況です。



TCP の名称について

TCP は 2012 年 10 月、ネパールに於いて NGO としての運営許可を得て登録を行いました。この際、サポーターの皆様には TCP の正式名称についてご報告をさせて頂いているのですが、新しく入会されたサポーター様もいらっしゃるようですので今一度、確認の意味を含めて NGO としての名称についてご案内をさせて頂きます。

2009 年に「Tibetan Children's Project」として活動を始めましたが、ネパールに於いてプロジェクト名は登録上「Twinkle Children's Program」となっております。これは登録した当時、ネパールでは「チベット」と名前を冠したもの、それに類するものに対して NGO の認可を下ろすことが出来ないとの指導によるものです。また運営実態が、プロジェクト (Project) というにはあまりにも小規模であるとの指摘を受け、こちらはプログラム (Program) に改めるようにとの指導を合せて受けました。NGO としての認可はプロジェクトの安定した運営のために必須と考え、認可を受ける事を最優先に考え、全ての指導に従う事にしました。しかしこれはあくまでも登録上の仮の名前との位置づけで、その後もプロジェクト自体は「Tibetan Children's Project」と名乗って運営しております。

スタッフについて

2017 年 12 月現在、TCP はアムチであるシェラップ・ギャルツェンを代表に、現地施設ではシェラップ、加藤ちあき、ツェリン・ラモが専属スタッフとして、また事務局として石川幸 (在ベトナム)、増田あき子 (在日本) の体制で運営をしております。これらのスタッフのうちツェリンを除いては、TCP より給与は支給していません。これは各人の「TCP の仕事は一切が菩薩行」という仏教的な動機により、全て無償で活動しております。

ボランティアであっても運営自体には大きな責任を自覚して仕事しております。TCP は目の前にある問題に対して止むに止まらず行動することから始まった組織であり、スタッフは社会福祉事業に特化したスキルを持っている訳ではありませんので至らない部分も多い事と思いますが、今後もぜひ皆様のご指導を賜りたいと思っております。



これまで 2014 年 5 月から教育係としてクンデ・ハウスのお手伝いをして下さっていたエリ先生は、昨年の報告書ではビザの都合により本年 7 月に帰国とお伝えしておりましたが、任期を延長して下さい 12 月末日をもって退任されました。エリ先生のご指導のお蔭で、子ども達は日本語能力が向上し、様々な日本の文化を学ぶことが出来ました。歌や演劇の指導も積極的に行って頂いたお蔭で多くのスキルを身に着ける事が出来ました。日本人補習校との仕事の兼務など忙しい中で尽力を頂き、感謝でいっぱいです。

2017 年運営目標の達成

本年は「クンデ・ハウスの施設整備」「子ども達の進路指導の充実」の二つを重点目標に掲げて運営を行って参りました。数年来の課題であったネパール教育省の監査による是正指導「男女の寝室を別棟とすること」を、プレハブの建設により達成することが出来ました。また「子ども達の進路指導の充実」は、それぞれの学習能力、適正、本人の意志と意欲を確認の上、学校とも連携して各人にふさわしい進路について道筋をつける事が出来たと考えております。



2018 年 運営の指針

2018 年の運営は下記の項目に力を入れたいと思います。

- ① 子ども達の教育の充実
- ② 長期的な運営指針の再設定

① 子ども達の教育の充実

昨年に引き続きこれからも優れた人材を育成するために必要な教育や体験は、積極的にやりたいと考えております。難民にとって一番大きく未来を変えるカギは教育にあります。子ども達がそれぞれの人生を充実したものにすると同時に、チベットの未来を明るくする希望となれるように、教育には惜しみなく取り組みます。

これまでと同様に学習面に力を入れると同時に、今年はスポーツなどの運動面での活動にさらに積極的に取り組みたいと考えています。思春期に差し掛かった子ども達を観察していると、その内側に秘めたパワーの現れ方や表現は実に個人差が大きく、中には自分をコントロールし難いと感じている子もいます。このような子ども達になるべく少ないストレスで集団生活を送るためにはどのような取り組みが有効か、ここ数年は試行錯誤をしてきました。その中で体験的に効果を感じたのは、身体を動かす事です。自らの中に渦巻く持て余し気味なパワーを運動によって上手に発散させると、落ち着きを取り戻します。スポーツの分野で自分の特性を発見した子ども達は、評価を受ける事で自信を得て、さらに安定した精神の基礎を築いて行きます。これらのことから、新年度はさらに積極的に運動を行い、心身ともに健康な身体作りに取り組みたいと思っております。



② 長期的な運営方針の再設定

2009 年 3 月にオープニングセレモニーを行った TCP ですが、実際に子ども達の引き取りを開始したのが 2008 年の 12 月であり、ここから起算すると既に丸 9 年が経過しました。この前年までの時点では毎年数千のチベット人が海外へ亡命を図る状況であり、今後もその数は減る事はないと予想していました。しかしながら 2008 年 3 月にラサで起こったチベット人によるデモを契

機に中国政府のチベットへの弾圧はさらに強まり、これまで最大の亡命ルートであったチベット→ネパールの監視が強化、この結果亡命者は激減しました。クンデ・ハウスが引き取りの対象と考えている年齢の児童の亡命は、現在ではほぼゼロの状態です。この様に設立当初に想定していた状況が様々に変化しています。

具体的には、プレハブの建設によりクンデ・ハウスの居住スペースが広がったため、段階的に児童の数を現在の 17 名から 20 名まで増加させることを考えおります。当初引き取り児童の規定を「亡命者」「孤児」としておりました枠組みをどの範囲まで広げるのか今一度検討しなければならなくなっています。また 5 年後、10 年後にクンデ・ハウスがどうあるべきなのかについてもより具体的な計画が必要な時期だと考えています。



クンデハーバルクリニックは設立当初、患者様は 100% がチベット人でした。その後、口コミにより年々ネパールの人の患者様が増加しております。これらの変化も当初は予想していなかった事です。受診される方々の利益になる取り組みに加えて、チベット医学の伝承に寄与できる診療所のあり方について、再検討しなければならない時期だと感じています。現状を踏まえて短期的、長期的な目標をそれぞれ考えたいと思います。

2018 年の年間目標は上記の通りです。この他に基本的な運営姿勢について今一度お伝えをさせていただきます。

毎年の激しいインフレに加えて、2015 年の大震災とそれに続く経済封鎖の影響による国内の大混乱は、ネパールの人々の心と体をすっかり疲弊させてしまいました。その後も遅々として復興は進まず、またそれらの状況が世界の中では忘れ去られているのが現実です。国を大きく発展させるような資源も産業もなく、国内の閉塞感はますます高まっています。

このような空気の中、基本的には外国の援助で運営を行っている TCP が地元の人々からどのように見られているのかは、常に注意を払うべき点だと考えています。難民を取り巻く環境は、と

でもセンシティブだからです。歴史的に見ても何かことが起こった時に、そのストレスの矛先がマイノリティーや弱い立場の人に向かう事は多々ありました。TCPの現地施設は、加藤を除けばチベット亡命者です。国を逃れ、ネパールに間借りさせて頂いている身です。非常に経済が厳しい状況下で自国民以上に難民が恵まれた暮らしをしているのは、周囲から不満が起こるのは当然のことです。

上記の理由からTCPは「地元並みであること」「地元の方々の良好な関係性を作る取り組み」に力を注ぎ、努力と注意を払って運営しております。またこの姿勢は周りとの足並みをそろえる意味合い以外にも、子ども達を支援慣れた難民にしない為でもあります。

そのためサポーター様が現地施設をご訪問下さる際に、非常に細かく持ち込み物資に対して制限を掛け、リクリエーションに関しても綿密な事前打合せをお願いし、贅沢になり過ぎないようにしています。ご多忙中、わざわざ現地施設までお運びくださるサポーター様にこのような制限を課しますことを非常に申し訳なく感じておりますが、どうぞ運営方針をご理解頂き、今後ご協力をお願い致します。

ご見学のお申し込みの増加に伴い、2014年より会員サポーター様以外のご見学を全面的にお断りする方針とさせて頂いております。引き続き2018年も同様の方針とさせて頂きます。

チベット難民の現状への理解の一助となればと考えて、初期には積極的にサポーター様以外のご見学の受け入れを行ってききました。しかしクンデ・ハウスへの物資の持ち込みなどに関して正しくご理解が頂けず、またご見学者様の意図がほとんどの場合「孤児院を訪問したという思い出づくり」であったため、子ども達への影響を考えて今後も特にクンデ・ハウスへのご訪問はお断りする方針です。

ネパールもそこに暮らすチベット難民も、現実的には明るい未来を予測できる要素はほとんど無い状況ではありますが、正しい動機を活動の中心に据えてやるべき事を合理的な手段で行い、堅実にプロジェクトを推進して参りたいと思います。ご支援くださる皆様のご篤志をこれからもたくさんの喜びに替えて、分かち合いたいと願っております。

2008年末にプレオープンしたTCPは、2018年が運営10年目となります。この間には大震災や経済封鎖などネパールの歴史に残る大きな出来事も体験しましたが、多くの方々のご支援のお蔭で今日まで無事に運営を続ける事が出来ました。これまでプロジェクトを支えて下さったサポーターの皆様に、この場をお借りして改めて御礼を申し上げます。

